

昭和四十九年度

## 特別研究生研究発表要旨

## 法蔵菩薩の永劫修行について

井上 恵 樹

法蔵菩薩の永劫修行という『大經』の説話が衆生海に語りかける、その内面的意義を思念してみたい。法蔵菩薩永劫の修行というとき、ここにまず法蔵菩薩とはいかなる方であるか、ここを知らずしては永劫修行も明に窺い得ない。法蔵とは何か、それは弥陀成仏のこのかた十劫を経たまいた今、既に過去仏として今、現在に何の働きなき、寓話の仏であるのか。そうではない。親鸞は阿弥陀の<sup>（准信妙文意）</sup>名号につきて号は阿弥陀であり名は法蔵であると道見せられた。つまり名号は因位法蔵を決して無視せるものでなく、却って表面に現じておるのである。そしてかつ名号は「行巻」の六字釈が積極的に示す如く、如来本願の名告りであり、今現在に於る現行表現である。では法蔵菩薩という事も、今現在に真意義をもち、衆生済度の真なる働きとして現行せられるものでなければならぬ。ここに曇鸞や親鸞は『論註』上巻観察門や「信巻」三心仏意釈に於て、一切虚仮の群生海と因位法蔵との深い感應を示されたのである。それならばでは、法蔵菩薩は、今現在に生きる私のどこに自覚的に看取せられるものであろうか。ここに私に

は善導の「如是」につきての意味深い釈、「又言<sup>（こゝろ）</sup>如<sup>（ごと）</sup>者如<sup>（ごと）</sup>衆生意也。隨<sup>（こゝろ）</sup>心所樂<sup>（ごと）</sup>一仏印度<sup>（こゝろ）</sup>之<sup>（ごと）</sup>」が思われる。「衆生の意の如し」とは、仏が衆生に迎合せられるという事ではない。衆生の意に先んじて衆生の意の根源に承問せられるという事であり、むしろ「如」の世界が衆生海の根源の処に、衆生の意を包み、衆生の意となりて因位に表現するという事であろう。だからここに、善男子善女人という衆生の、その意に従がう行として示された五念門の行という事も、親鸞によりて因位法蔵菩薩こそが修せる行として見開かれて来ねばならぬのである。<sup>（入出二偈）</sup>ここに、一切苦悩の凡夫の修せる行・在り方とは、その本源の処には菩薩に於てこそ負荷せられる行であり、法蔵を主語としてこそ行ぜられる在り方である。曇鸞が法蔵の意義を全て衆生の苦悩業縁に返された（『論註』上巻、観察門）は、この間の消息である。つまり我々はその久遠の昔に既に法蔵菩薩によりて我が苦悩流転の真源に立たれていると知る外ない。虚仮詭偽に自身が在るその事自体が、法蔵が我となりて一切の罪を背負い給う事実である。「王若得<sup>（こゝろ）</sup>罪諸仏世尊亦<sup>（こゝろ）</sup>応<sup>（こゝろ）</sup>得罪」の意味がここに始めて明らかになる。法蔵は久遠の因位に在る事によりて、我が身久遠の本源因と誕生せられてあったのである。

ところで法蔵はただ衆生海の根底に始源的に誕生し給うものではない。それは、法蔵が世自在王仏の淨妙国土のもとにこそ誕生し本願を撰取せられた事である。それは清淨報光明土、無漏真実の土より法蔵が降誕せられた事である。親鸞をして「弥陀成仏のこのかたはいまに十劫とときたれど、塵點久遠劫よりもひさしき

ところでこの消息を更に象徴的に表現せるものが、『観経』の光台現国の幽説でなからうか。唯仏与仏の釈迦自内証を承問する『大経』阿難の問と、光台現国の内景を問う韋提の問との、その近密類似性は強くその事を主張するものである。光台現国の事實は、諸仏の称讃し給う報仏阿弥陀が衆生真底に降臨し給いた事實でないか。この感動をこめて親鸞は、『浄土和讃』観経讃を光台現国より始め、そのただ中に、人間流転の歴史を繰々展開せられ、遂に「逆惡もらさぬ誓願に方便引入せしめ」られる事を深く吐露せられたのである。光台現国に於て韋提が阿弥陀を別選する

この始胎的法蔵の誕生を思うとき、ここには、その法蔵が永劫修行せられるという事の意義を深く窺つてみねばならない。永劫修行は『大經』では「和顏愛語先意承問・專求清白之法」以惠三利羣生」等と教示せられる。ここに永劫修行に二相あるを思ひしめられる。それは、衆生の意の意こころの本源に衆生に先だちて承問し沈潜誕生せんと和顏愛語の永劫修行と、而して又、衆生海に清白の法、名号を廻施して衆生の往相成就せしめんとせられる永劫修行である。そしてこの二相の永劫修行が二つにして全く一つの如來本願を成ずるところに「勇猛精進志願無倦」と表わされるのであろうか。ここを明らかにしよう。法蔵永劫修行とは因位法蔵が果上弥陀になるべく「逆惡もらさぬ誓願に方便悲引」せられる方便修行、衆生根源の法蔵が衆生に往相の信心開發の機縁を熟さしむべく修される修行であると聞思せられる。しかし我々は同時に、『觀經』の方便が却つてそこに衆生の眞の姿を方便開示しゆけばこそ、如來本願招喚の声は眞に衆生海の上に成就することに思ひを到さしめられる。つまり法蔵永劫修行は方便悲引の往相修行であること、その即一なる処に、衆生の真底に法蔵として誕生せられるが為の還相なる永劫修行と内面展開する。定散二

善方便之教という如来大悲の現動の中に於て、衆生海を清浄業処に往相悲引し給う永劫の修行、つまり「定者即息慮以凝心散者即廢<sup>(玄縁分)</sup>惡以修<sup>(玄縁分)</sup>善」が、正しくその定義そのままに「定心難修息慮凝心故、散心難行廢惡修善故」と開いて、衆生の真現実の姿を明しその只中に生れ運命を共にせんとしゆく如来修行というものを示してゆく。「定散諸機をあわれみて」と嘆ぜられる事が亦「定散諸機をこしらえて」とも深め換言せられねばならぬ所以がここにある。ここに華座觀阿弥陀仏空中住立という、如来の定散自力衆生界への影臨という、ただひとつの消息が、善導によりて「証得往生：立即得生」、「立撮即行不<sup>(高僧和讃善導讃)</sup>及三端坐以赴<sup>(高僧和讃善導讃)</sup>機」なる二重の意義に開かれねばならなかったのである。誠に如来永劫修行は、如来が真に「われ」となるところに沈潜誕生せられる事であり、その修行が自然即一に往相悲引の御修行の中から開かれてくるのである。法藏修行が永劫修行でなければならぬのも、その済度の悲叫が衆生の永劫流転の在り方にこそ沈潜するところに発せられねばならぬ為である。弥陀の招喚は、釈迦発遣として衆生海の根底に到り着き、沈潜表現せられることにおいて、悲本願の招喚という肉的生命を更に深く燃焼すると思われる。

## 金世宗の宗教政策

——大定二十年の寺觀等存留制限——

今井秀周

金中期、濫立される寺觀や、その信徒達の活動を規制肅清せんとして、世宗は幾度かにわたって制詔を出したが、大定二十年(二二〇)に発された寺觀等の存留に制限を設けるとの制も、その一つである。世宗のこういった政策は、既に野上俊静博士の「金の財政政策と宗教教団」にまとめられているが、こと大定二十年の制については、まだ論及されてはいない。したがって新資料の紹介という形で、ここにその概略を述べていきたいと思う。

世宗の寺觀に対する制圧策、即ち寺觀創建の禁止令は、大定十年(二二〇)すぎから実施され、大定十八年(二二七)になって三度目の禁令が下された。大定二十年に行われた寺觀等存留制限の制度は、十八年の禁令に細則が加えられたものである。この内容は『金石萃編』卷一五七所收三官宮存留公拋碑に詳しい。その前半部を訳してみると、

京兆府は尚書礼部の符節により、尚書省の委任せる使者に従い、つつしみて聖旨を奉じ、制す。今後、創造されて名額なき寺觀は、尽くこれを除去す。ただその中に絵塑したる神仏の像あるものは、除毀するに忍びず。存留を許可し、併せて寺觀創造の罪を免す。もし今後この制を犯す者あらば、本人は違制の罪に処す。累役人の中、その罪を既知しながら罪